不定期刊行　　第 350 号　　2010.04.25

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

長野県山岳協会　新体制固まる

今月初め、長野県山岳協会の第５１回定期総会が開催された。今年は、２年に一度の役員改選期にあたるため、新役員の選出が行われた。高校教職員関連の加盟団体である高体連と信高山岳会からも、今回も４人の役員が選出された。今年度は、北信越大会が長野（黒姫山）で行われる。お世話になることもあろうかと思うので、四役ならびに信高・高体連から選出された理事を紹介する。会長は、高体連登山専門部のＯＢの宮本義彦先生である。不肖小生も、理事長留任と相成った。情報が集まるところにいるので、今年もかわらばんで、様々な情報を流したいと考えている。なお、すべての理事については、長山協のホームページにアップされているので、そちらを参照願いたい。

会長	宮本義彦（グループドモレーヌ・信高）		
副会長	田中幸雄（伊那山の会）	西田均（大町山の会）	森山議雄（アートウォール）
	花岡勉（岡谷山稜会）	三尾敦（ホワイトバーチ長野）	
理事長	大西浩（信高・高体連）		
事務局長	小林貞幸（中条山岳会）		
副理事長	中島俊弥（登攀クラブ安曇野）		
国体委員長	浮須由実（グループドモレーヌ・信高・高体連）		
高体連担当	塩川淳男（信高・高体連）		

池工山岳スキー部、栂池から天狗原へ

２４日、今年度の最初の山行として、山スキーを企画した。前日までの寒さや雨に変わり、朝起きると青空が広がっていた。参加者は山岳部の生徒１名、スキー部の生徒１名、去年顧問をされていた藤田先生に顧問の私という雑多な４名である。７時学校集合、８時半栂池スキー場着。先々週の山岳スキー大会の時には、下まで滑ってくることができたが、さすがにこの２週間で融雪が進み、からまつゲレンデはもう土が出ていた。ゴンドラから眺めると、中間駅まで車で入れるという雪のない状況だったが、上からつないでくればなんとか「はんの木」コースは下ってこれそうなことを確認しながら登っていった。９時２０分、栂の森を出発。このあたりは青空が広がっていて気持ちがいい。スキー部のＴ君はボードでの参加なので、事前に大町高校からスノーシューを借りてきた。残る２名は山スキー初体験であるが、小生のお古のスキーで対応。２年生のＹ君は、僕と靴のサイズが合ったので好都合、元顧問の藤田先生にはジルブレッタで対応した。調整可能なジルブレッタは、スキー靴があれば、誰にでも合わせることができるので、高校生はもちろん経験のない顧問であっても体験するには至極具合がいい。

早稲田の小屋を過ぎたあたりから雪がチラチラ舞い始めた。前日の寒さと雨をもたらした強い寒気を伴った気圧の谷がまだ完全に抜けていない感じで気温も低い。１０時、大阪経大小屋付近で一本。雪の勢いが激しくなり、さっきまで見えていた上の方が見えなくなってきた。成城小屋を過ぎると、目の前に天狗原への急斜面が迫ってくる。１１時急斜面の下部にて一本。視界は回復してきたが、上部は相当吹いているような感じで

ある。昨年あまり活動のなかった生徒にとっては、いきなりの山行で少ししんどそうだ。天候の状況や、生徒の様子によっては、白馬乗鞍までということも考えていたが、この時点で天狗原までと決め、気合いを入れ直して登り始める。藤田先生のスキーは全面シールではなく、細いためややクラストした斜面に苦戦。スノーシューのＴ君も急斜面にフラットフッティングがうまくできない。またＹ君は慣れないスキーの取り回しに四苦八苦と、三者三様に苦労しているが、それぞれ少しずつ高度を稼いでいく。

　雪は上部に行くにつれ激しくなり、天狗原に出るとやはり風は強かった。１１時５０分、祠の脇に到着。歩いて来たパーティが数パーティの他、ヘリスキーの客と覚しきザックを背負っていないスキーヤーも数人いた。ここですぐ下りるという選択肢もあったが、時間は早いし、耐えられないほどの吹雪でもなかったので、山岳部の山行ということも考えてツェルトを広げ、その中でお湯を沸かした。ツェルトにくるまっていると、天候のすき間をねらって、ヘリが飛んできた。窓には「下山して下さい」という張り紙がしてある。ヘリスキーの客を慮っての飛来だろう。パトロールがヘリから下り、一人一人にヘリスキーの客がどうか確認しているようだ。我々は客でないから「自己責任」、彼らのエリア外である。１２時３０分、下山開始。ボードのＴ君はさすがスキー部である。「慣れない背中の荷物が重くバランスが取りづらい」と言いながらも、見事なシュプールを刻む。中学校以来の３年ぶりのスキーというＹ君も、何とか急斜面を下ることができた。「カービングではないスキーは初スキー以来で不安」と言っていた藤田Ｔだが、なかなか見事な滑りを見せてくれた。

　斜面を下りきったところで、昼食とした。安全地帯まで下り、ここからは何の問題もないはず・・・であった。しかし、思わぬところに落とし穴があった。自戒と反省を込めて敢えて恥をさらす。大阪経済大学の小屋を右手に見て、林道をショートカットしなければならないところを、はやまって一本早く谷をおりてしまった。それだけなら問題は少なかったのだが、問題はもう一つあった。上部でスキーに苦労していたＹ君が、谷を下るのを躊躇していたので、彼には林道と合流したところで待ち合わせようと林道を下らせることにし、不用意にもパーティを分断してしまったのだ。気持ちよく２５０ｍほど下ったところで林道に出ないのでおかしいと気づいた。頭上にロープウェイのケーブルがあり、ＧＰＳも持参していたので、現在地はすぐに同定できたが、問題はＹ君との連絡がとれないことである。我々は２０ｍほど登り返して、尾根を越えなければならない。場所を少しずつかえてＹ君に電話をしたが谷の中なので、なかなか通じない。５回目に本当に偶然、途切れ途切れであったが、電話が通じた。Ｙ君は「ゲレンデトップの林道入り口にいる」という。「とにかくそこを動かないように、我々は少し時間がかかるがそこで待っていてくれ」ということを伝えることができたのだった。電話が通じたのは本当にその一瞬だけ。Ｙ君はゲレンデまでは下りていたので、その限りで問題はなかったのだが、しかし大きな反省をさせられた。一方我々は、シールをつけて尾根まで登ったところから回り込んで、もとの林道に戻った。結果的にはＹ君と合流することができたのだが、待ち合わせ場所にも若干手違いがあり、さらにゲレンデ間近でも全く電話が通じず、ややパニクった数１０分であった。というわけで、楽しい思いも残しつつ、やや苦い経験の池工デビューとなってしまった。・・・慢心はいけません。反省、反省。